

すぎなみ大人塾2020 荻窪コース

新荻窪はっけん伝～今だからこそ 知ろう・つながろう・伝えよう～

実施日時：2020年11月14日 場所：消費者センター

学びの案内人：高橋明子（株式会社エンパブリック）

ゲスト：「荻窪の野鳥」野鳥写真家・西村真一

テーマ：“知りたい”を実践の巻

司会：今日は、こんなにいいお天気の中、勤勉に荻窪コースに来ていただいて本当にありがとうございます。今日のゲストの西村真一さんに楽しいお話を伺わせていただきながら和気あいあいと進めていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。では早速、今日のコースの説明を学習支援者の高橋明子さんをお願いしたいと思います。

高橋：それでは今日もよろしく願いします。前回のゲストには、荻窪音楽祭関係の方に来ていただいたのですが、皆様の感想の中に、エピソードを書きくださった方もいらして、音楽祭が再開したら行ってみますと言ってくくださった方もいらっしゃいました。私たちはこの講座で「この場に集う仲間との豊かさ再発見」というテーマで、300ものエピソードを参加している皆さんから出していただいております。もうひとつテーマがあって「徒歩圏内の近所の豊かさ再発見」というものです。今日のゲストの西村さんのお話がこのテーマでして、まさにドンピシャというわけです。まずは、このテーマにぴったりの西村さんのお話をいただけたらなと思っております。

今日は、西村さん、野鳥写真家ということで、そのようにご紹介をさせていただいておりますが、本講座の第一回の打ち合わせの中で、最初に西村さんがおっしゃったのは、「僕は野鳥のことを皆さんに紹介したいわけじゃない。今までは言わなかったけれど、皆さんのキャリアの中で、いろいろ人に伝えたいことをお持ちだよ」と、おっしゃった。皆さんの今後の人生の中で、それを伝えればいいじゃないかということでした。西村さんは「鳥と中西悟堂さん」というテーマを核に中西さんの事を調べていったら、こんなに詳しくなっちゃって、今こうやって伝えている。自分が調べた過程とかを伝えることはむしろ皆さんにお伝えできるかもしれない。

荻窪界隈の鳥ですけど、実際今日ご紹介いただくのはロケハンにも行ってくださって、つい最近の荻窪周辺の鳥の様子なんかも挙げていただいているので、ぜひお楽しみになさってください。西村さんの詳しいプロフィールは講座資料の中に入っておりますので、ご覧いただけたらと思います。では、よろしく願いします。

西村：ただいま高橋さんからご紹介ありました西村です。私、生まれも育ちも杉並で、メインは阿佐ヶ谷ですが、荻窪にも関係しております。この間の11月3日にいわゆるロケハン

を行い、JR 荻窪駅南口から善福寺川の方へ行きました。そこで鳥を見て、また戻ってきました。

プロフィールにも書いてありますが、「公益財団法人日本野鳥の会」の基を作った中西悟堂さんのことを研究していきまして、実は日本でただ一人の中西悟堂研究家です。日本でただ一人っていう事は、世界でもただ一人です。中西悟堂さんをここまで深く研究している方は私以外に誰もいないのです。何で私が深く研究するようになったのかはおいおいお話するとして、それが実は荻窪と深く関わっているという話をこれからパワーポイントを使いながら皆さんに色々ご説明したいと思っております。

先程、高橋さんからもお話がありましたけれども、皆さん、それぞれいろんなキャリアを持っているわけですね。そういうキャリアを他の人に伝える、もちろん話すこともいいですし、文章で書くこともいい。せつかく自分が持っている長年のキャリアを自分で抱きかかえているだけじゃなくて、それを他人にも知らしめるっていうことが、一番大事なことじゃないかなと思います。人に知らしめるっていうのは、人の前で話すことが苦手だとか、文書を書くのが苦手だという方もいらっしゃるかもしれませんが、何も別に知らないことを伝えるわけではない、自分の知っていることを伝えたり、また文書に残すわけですから、それでよろしいかなと思います。

では、これから始めていきたいと思っております。

(パワーポイントを提示) これは、令和2年11月3日の荻窪駅の南口です。ここからスタートして大田黒公園、そして善福寺川に行きまして、上流の方に行き、それからまた戻ってきて、荻窪駅の北口に行って解散しました。

最初に、荻窪駅の南口に集まりました。

ここには「水鳥に出会える街、荻窪南口仲通り商店街」という垂れ幕があります。

ここから歩いて700歩、忍川上橋で水鳥達にご挨拶しました。

皆さん、善福寺川のことはよくご存じかと思っておりますけれども、善福寺川というのは善福寺池から水が流れて、杉並区和田のところで吉祥寺から来た神田川と合流して、そこで善福寺川は終わってしまいます。大体、距離にすると10.5キロくらいです。今は善福寺の公園の池に水は湧いていません。地下水を汲み上げて水を流しているわけです。ただ、ところどころ善福寺川でも湧水が見られます。そういうふうには川が流れていまして、今の季節ですと冬鳥のカモが来ています。ちょっと分かりにくいかもしれませんが、垂れ幕の一番右側にカモの絵があります。あれはマガモというカモです。

今ちょうど紅葉が盛んで夜になるとライトアップされて大変綺麗な大田黒公園ですが、この公園にも小さな池があります。

これはカルガモというカモです。カモというのはまあ大体冬鳥です。冬鳥というのは、日本より北の地方で繁殖して秋から冬になると日本に渡ってきて越冬する鳥ですが、カルガモ

だけはどういうわけだか一年中います。留鳥（りゅうちょう）と言います。また他のカモはオスとメスの色彩が全く違い、オスの方がいわゆる派手な姿をして、メスの方が地味な姿をしているのですが、カルガモの場合は雌雄同色の姿をしています。杉並区内においては、善福寺川とか善福寺公園の池とかでカルガモは繁殖しています。今年は、僕は善福寺公園でも見たし、あと妙正寺池、妙正寺公園、池から流れている川ですね、妙正寺川なんかでも、やっぱりカルガモが繁殖していましたし、その他でも色んなところで繁殖しています。

次は、川に行きまして、オナガガモというカモがいました。向かって左側がメスで、右側がオスです。何をしているかという、水草を食べているのです。オナガガモっていうのはオスの場合、尾っぽが長いのです。英名を pintail（ピンテイル）と言うのですけれども、オスとメスで姿が違うっていうのを分かっていたきたいなあと思います。どうしてメスが地味な姿をしているかという、これは繁殖に関係してまして、子育てするのが、大体、鳥の場合メスが多いのですけど、やっぱり外敵に見つかりにくいというので、ああいう地味な姿をしているという風に言われております

これはちょうど逆立ちをして餌を捕っているところです。カモというのは餌を捕る時に、ちょっと専門的な話になってしまうんですけども、水面に潜らないで餌を捕るカモと完全に体を水の中に潜って餌を取るカモというふうに2種類に分かれます。これは、潜らないで逆立ちしていますから、専門用語で言うと水面採餌（すいめんさいじ）ガモというカモです。鳥を見始めるようになればカモについて分かると思いますけれども、例えば善福寺の川でカモがああいう風に逆立ちしていたら餌を捕っていると思っていただきたいと思います。水面が浅いのですね、逆立ちして水底にくっついちゃうぐらいですから。

これはまた別のカモでコガモといいます。子どものカモじゃなくて、小型のカモです。これもシベリアとかそっち方面から渡ってきますが、日本の例えば高い山地、上高地とか、そういう高いところでは繁殖もしていますが、ほとんどは外国から渡ってくる。こういう渡り鳥が渡ってくるということは、例えばこの鳥がもしかしたら、ロシアから渡ってきたかもしれない、そうするとロシアと善福寺の川が繋がっているわけですよ。これは冬鳥ですけども、夏になるとツバメが渡ってきます。ツバメもフィリピンとかですから東南アジアからわたってくるわけで、そういう点と点が結び付く。昔は渡り鳥っていうのは、例えば夏鳥だったら夏にいるのだけれども、秋冬になるといなくなっちゃう。いったいどこ行っちゃうんだ、もしかしたら土の中に潜っちゃうんじゃないか。そういうことを言われていた時代もありました。どこへ行くのか調べるのにいちばんいいのはこの渡り鳥と一緒に飛んで行けばいいのですがそれは出来ないの、いわゆるバンディング調査と言いまして、許可を持った人が鳥を捕まえて、それに足輪をつけるわけです。そして次の調査地でまたバンディング調査をやって足輪が同じだと確認できれば、A地点とB地点が繋がるのです。だから、このコガ

モがどこに行っちゃうかは誰も分からない。何を言いたいかっていうと、自然界には分からないことがいっぱいですよ。人間は何でも知っているような顔していますが、このコガモがいったいどこへ渡っていくかは誰も分からない。自然界っていうのは、鳥だけじゃないのですけども、そういう知らないことがいっぱい面白いなと思います。

これは、カワウという鳥です。これも善福寺川にいました。善福寺川にもいますし、あと、善福寺の公園の池にもいます。皆さんよくご存じの長良川なんかで行う鶺鴒、あれは、これより一回り大きいウミウというウを使います。カワウではなくてね、ウミウ。どういうわけかという、ウミウの方がちょっと大きいのです。鮎を捕るのに大きなウを使う方が適しているのじゃないですかね。ウも野生の鳥ですから、勝手に捕る事はできません。茨城県に鶺鴒の岬というところがあるのですけれども、そこで国から許可を得た人がウミウを捕まえて、それを各地の鶺鴒をしているところに卸すわけです。

カワウは目を見ていただくと、ルビー色をしている鳥です。善福寺の公園の池にいてもカワウですからね、イケウではありません。これは善福寺川にいますからホントのカワウです。

これはスズメですね。最近スズメの数が少ないって言われていますけども、それでも杉並区内にはまだまだいますね。スズメというのは実は稲作、お米と関係してまして、稲作文化とともに中国の方から大陸から日本に渡ってきたと言われてます。ですから、大昔にたどれば、スズメというのは日本列島にいなかったのですよ。その頃はアジアなどお米を作るところにいて、それが日本に渡ってきた。今いろいろと問題になっている外来種、ハクビシンなんかもそうですけれども、鳥ですとソウシチョウとかガビチョウとか、そういう外来種って果たしていったいどこで線を引くか？スズメも基本的に言えば日本にいなかったわけですから、外来種になるわけです。だから外来種といっても、例えば、明治から日本に入ってきたのを外来種というのか、それとも戦後入ってきたから外来種というのか、そこは非常に線引きが難しいところですね。スズメもかつてはいなかった。そんなこと言ったら日本人だって外来種みたいなもので、どこから渡ってきたのか分からないですけども、モンゴリアンと言ってモンゴルの方から来たのかもしれないし。だから何て言うのかな、一概に外来種っていうのは難しいですね。ひとつの生き物が、いったいつから日本に来たのか分ければ本当に外来種って分かるのだけどもね、なかなか外来種っていうのは難しい問題だと思います。

これ、セキレイの仲間でキセキレイという鳥です。ちょうど我々が善福寺川を散策した時にいましたね。尾羽のところは黄色くて、あと胸も黄色いんですけども、こういうセキレイの仲間なんか、善福寺の川にいます。善福寺の川を散策して、黄色い鳥がいたらキセキレイだなと思ってください。

これは黄色いセキレイではなくて、ハクセキレイという白と黒の鳥ですね。川の上の電線にとまっていたのですけれども、この鳥は最近増えています。今から 60 年ほど前は冬鳥で、夏季にはいなかったが、今は一年中いて、阿佐ヶ谷駅の南口の広場でも見たことあるし、うちの前なんかにもいるし。白と黒の尾羽の長い鳥を見たら、まずハクセキレイで間違いありません。

善福寺川を散策して、全部で 14 種類かな、カラスも入れて。確か 13 か 14 種類の鳥がいました。杉並区内でも、1 月 2 月、例えば僕がフィールドにしている善福寺公園なんか、数が多いと午前中だけで 35 種類ぐらいいるんですよ。私、そういう野鳥の観察会、探鳥会を開催するのですが、その時にやっぱり参加者の人に、少なくとも自分の歳の数だけ鳥を探してくださいって言います。さすがに小学生・中学生ならともかく、中高年になるとなかなか難しい、冗談ですけども。そのぐらい皆さんの家の周りにも鳥はいるということ、これから気にしていただきたいなと思っております。

これは青梅街道、荻窪の駅の北口の青梅街道のところですよ。なんでこの写真が今出てきたかって言うと、実は北口の薬局が入っているビルの上に魚屋さんの看板があるのですが、ここを、さっきお見せしましたハクセキレイがねぐらにしていまして、夕方になると集まってきていました、集団でね。今年はどうかなって思ってたのだけれど、残念なことに夕方暗くなるまで待っていたんですけど、現れませんでした。

これを撮ったのは、今から 3 年前の 1 月です。魚屋さんの看板のところにも白と黒の鳥が 20 羽ぐらいとまっていますが、これは全部ハクセキレイです。それまで青梅街道にある街路樹なんかも、ハクセキレイがねぐらにしていましてね。11 月 3 日は夕方 5 時近くまで待っていたんですけど現れませんでした、近くでハクセキレイの声がありましたので、多分どっかでまた、こうやって集団でねぐらを作っているのかもしれない。だから荻窪の野鳥って言えば、代表的なのがこのハクセキレイだと言えます。白と黒の鳥です。

こういう風にねぐらにしているんですよ、看板にとまってね。

参加者：見られる可能性は十分あるのですか？

西村：いや、わからない。今後、ここに来るかどうだか、それはハクセキレイに聞いてみないとわからない。僕に聞かれても、わかりません。

さっき、中西悟堂の研究者と申しましたけれども、これからちょっと、「日本野鳥の会」を作った人、中西悟堂という方との関わりの話をします。

中西悟堂は今度の 11 月 16 日で生誕 125 年を迎えます。昭和 9 年に「日本野鳥の会」というのを作りました。金沢の生まれですけども、昭和の初めに現在の世田谷区北烏山に住んでいまして、詩人でもありました。そこから当時西荻にありました「天徳温泉」というところ

によく通っていたのです。「天徳温泉」は、「天徳湯」という銭湯になりましたが、今はもうなくなりました。その「天徳温泉」に通いながら近くの善福寺池の環境が気に入って、昭和4年の11月に善福寺池のほとりに引っ越してくるわけです。そこでいろんな生物、昆虫とか植物、淡水魚、鳥なんかも観察して、昭和9年の3月に「日本野鳥の会」を立ち上げるのです。

その当時の善福寺公園の鳥の記録というのが残ってしまっていて、年間87種類を確認することができて、23種類が繁殖していたという記録が残っているのですよ。僕がフィールドにしているのが善福寺池を含む善福寺公園なので、その当時の、昭和の初めの善福寺っていったいどういう場所だったのかなというのを、かねがね知りたいと思っていたのです。先程も言いましたけれども、僕が思っていたことを誰も調べた人がいないんですよ、善福寺が当時どうなっていたのかを。仕方がないので、自分で調べるしかないという風に思ったのだけれども、まずどこから手を出すっていうかな、手掛かりをどうやってつかめたらいいかっていうのが全くわからなかった。それが荻窪駅の南口にある古書店、今から20年ほど前にこの古書店にぶらっと入って、僕も古本が好きなので、何かないかなあと調べて本をあさっていたら、「東京古書店グラフィティ」という、東京の古書店を紹介している本がありました。本を立ち読みしてペラペラ見ていたら、東京の神保町とあと田端に、いわゆる古地図を売っている古書店があるということがわかりました。早速、この本を買い求めて、次に昭和の初めの善福寺公園や善福寺池の様子がわかる地図は、そういう古書店に行けば売っているのではないかなと思って、最初に行ったのが田端の忠敬堂（ちゅうけいどう）というところでした。田端の忠敬堂っていうのは、日本で唯一の古い地図専門の古書店です。残念ながら、今、旦那さんが亡くなって閉店になっちゃったんですけども、そこに行った時に僕が思っていた昭和初めの善福寺の池が示されている地図はなかったのですが、明治時代の善福寺の池の辺りの古地図があったので、それを買ってきました。

その後、神田の神保町に1階が岩波書店の本を主に扱っているブックセンターがあり、その2階に古本屋さんがあります。

これは最近のそのお店の様子ですけれども、僕が行った、20年程前は古地図の棚が種々雑多にあったのです。それこそ古い地図が山のようにありました。

そこで探し出したのが、右から左に読んでもらうとわかりますが、「吉祥寺」という昭和12年測図、昭和14年発行の善福寺地域がうつっている古地図です。これこそ、まさに僕が求めていた地図です。ちょっとわかりにくいかと思いますが、この辺が善福寺で、この赤い丸が中西悟堂が住んでいたところ、その隣が東京女子大、まあそういうような感じですよ。この古書店、今は案外に古い地図が整理されているんですけども、僕が行った時はほんとその中から勝手に探してくださいってぐらいに古地図の山で、僕がこれ見つけた時は、まあ変な話なんだけど、この地図が僕のことを呼んでいたのかなあと感涙して買い求めました。こうやってこの地図から、その後の戦後のこういう吉祥寺の地図を集めるようになったし、それが高じて杉並区内の古地図を集めるようになりました。

善福寺の公園の池というのは、現在はいわゆるボートが浮かんでいる「上の池」と葦（アシ）や真菰（マコモ）が生えている「下の池」、2つに分かれています。これを見てわかると思うんですが、いわゆるボート池、「上の池」というのは存在しているのですが、この当時、「下の池」というのは存在してないのですよ。実は、あの「下の池」というのは、戦時中昭和15年から16年くらいに川をせき止めて作った人工の池なのです。そんなこともこの地図からもわかるし、この後、戦後すぐに発行された吉祥寺の地図を入手したのですが、それには下の池が出来ていました。

中西悟堂宅っていうのは、その赤い丸のところですね。実は、ここの住所は分かったのですが、この中西悟堂宅というのが、現在どこにあるのかっていうピンポイントの位置はわからなかった。それなのにひょんなことからわかったのです。杉並会館で野鳥図鑑家の谷口高司さんと写真展をやることになりまして、マヒワという鳥の写真を善福寺公園の上の池のところで撮っていたのです。僕が公園で写真を撮っていたら、通りすがりのご婦人の方が僕に話しかけてきて、私の家の隣に昔、鳥で有名な人が住んでいたのですよって言うんです。それを聞いてびっくりしちゃって。それはもちろん中西悟堂に間違いはないと思って、その方のご住所とお名前をお聞きして、その後すぐその方のお宅へ行って、そのご婦人の旦那さんに話を聞いたら、隣の家が中西悟堂の家だったのです。そこで初めて中西悟堂邸っていうのがわかってね。いや、ほんと偶然の一致。やっぱり日頃の行いがいい人は違うのかなあと思いましたね。ほんと、なんというのかなあ、皆さんもあるかと思いますが、なぜ自分にとってポジティブなことが起きるのかという経験が皆さんにもあると思うんですよ。やっぱりそれはなんかしら持っているんですよ。持っていなければそういう出会いというのはない。だから僕がたまたまその日、善福寺公園でマヒワという鳥を撮っていた時に、たまたま通りかかった人が僕に「私の家の隣に鳥の有名な先生がいたのですよ」と言ってくれない限りは、僕は中西悟堂邸の住所は分かっても、ピンポイントでその場所は分からなかったんですよ。こういう出会いってほんとに不思議ですね。

郷土博物館の学芸員の方と知り合いになりましたので、古い地図を集めるたびに今度この地図を入手したよとか、こういう地図を持っているよとかいう話をしていました。

さて。皆さん、杉並区民ですよ。自分の誕生日は知っているけども、自分の住んでいる杉並区の誕生日がいつだか知りませんか。本当。知らないの。昭和7年10月1日です。その時に杉並区の地域にあった井荻町、杉並町、高井戸町、和田堀町の4つの町が合併してできました。杉並区役所に行ったことがある人。場所、わかりますよね。4つの町が合併したときに、杉並区役所をどこに作るかという話になって、皆それぞれの町の人が、おらが町の役場にしてくれと言いますよね。結局、当時の杉並町の役場の場所に杉並区役所が出来ました。青梅街道に面しているし、阿佐ヶ谷駅にも近いし。交通のアクセスとか、杉並区の街の有力者がいたかどうかはわからないけれど。それから、今だと市町村が合併すると、それぞれの

名前を2つくっつけちゃうじゃないですか。井荻、杉並、高井戸、和田堀の4つの町が合併したんですけれども、杉並町の勢力が強かったのか、区名自体にも杉並がついた。役所も杉並区役所があそこにできた。

杉並区は2年後に90周年になります。実は70周年の時に杉並区立郷土博物館の本館で、「杉並の地図を読む」というので企画展をやりました。その時に、私が持っている先程の吉祥寺の地図などを本館の展示にお貸ししました。だから、今度90周年の時にはこの地図展をやろうと学芸員に言っています。

ちょうど今、ここから歩いて5分のところの郷土博物館分館で「絵葉書から見る杉並」をやっています。この絵葉書がどういう絵葉書かと言いますと、これは東京女子大学です。東京女子大というのは、今から102年前に西新宿の角筈で誕生したのですが、その後、大正13年4月1日に、今の場所、当時は井荻町と言いましたけども、善福寺に引っ越しています。これは、東女の学生寮を建築している時の絵葉書です。いわゆる東西寮といいまして、向かって右側が東寮、ちょっと画面から外れていますが、それが西寮です。この東女の絵葉書ですけども、これも先程の神保町の古書店で色々地図とか買うようになったら、お得意さんということで、目録を送ってくるようになったのです、いわゆる古書目録。その中に大正13年6月に発行された東京女子大の献堂式記念絵葉書という6枚セットの絵葉書が目録にありました。目録ですからものがないんですよ。ものがないから、どんな絵葉書が入っているかわかんないんですけども、もしかしたら当時の善福寺が写っているような絵葉書があるんじゃないかなと思って探したところ、ドンピシャだったのです。

この辺が善福寺の下池の風景です。撮影したのが大正12年7月25日ってここに書いてあるのですが、大正末期の風景、つまり昭和初期に通っていた中西悟堂が見た風景だということですよ。これから、私のこういう古い絵葉書を集める旅が始まりました。これ、原版は今、分館で展示していますから、よろしかったら、ぜひ見に行ってください。

平成23年に、「野鳥の父・中西悟堂と善福寺池」という展示をやはり分館で行いまして、この時資料が約300点あったのですが、そのうちの9割の270点は私の資料でした。もうとにかく中西悟堂フェチになっちゃって、ありとあらゆるものを集めるようになっちゃって、もううちの女房は呆れています。

その後、今から5年前ですけれども、生誕120年の時にやはり「野鳥の父・中西悟堂をめぐる人々」というのを博物館分館で展示して、図録も作りました。自分が持っている資料を自分で抱えずに、こういう展示会で皆さんに見てもらって、それからまた輪が広がっていくということがいろいろとありました。

今開催しています「絵葉書から見る杉並」という展示ですね、郷土博物館分館の2階で行っ



ていますので、まだご覧になっていない方はぜひ見に行ってください。今の図録も1部300円で売っています。図録に、「古い絵葉書を楽しむ」というコラムも書きましたので、よろしかったらそれも読んでいただけたらなと、今のエピソードも書いています。

ちょっと長くなっちゃったみたいですが、ご清聴、ありがとうございました。

高橋：ありがとうございました。この講座のゲストに西村さんをご紹介くださったのは原田さんだったんですけれども、最初は何のご専門家だと思っていらっしゃいましたか。

原田：実は、西村さんは私の小学校と中学校の先輩でいらっしゃるのです。初めてお目にかかったのは探鳥会の時ですが、その時も、古地図の話や何かが広がってとても楽しかったので、ぜひ、本講座のゲストにと思ってお願いしたんです。今日もお話がいろいろで、やっぱりアンテナを広げているといろんなことがわかるというのが西村さんのお話からにじみ出てきたので、ぜひと思ってご紹介いたしました。

高橋：ありがとうございます。さっきの、「鳥を見ていたらお隣に住んでいた方が」という出会い、魔法みたいですね。

西村：ほんとにね、例えばまた別の話があって、先程「野鳥の父・中西悟堂と善福寺池」という企画展を分館でやった時に、その紹介が東京新聞に載ったのですよ。東京新聞に知り合いの人がいますので、その人にブッシュをかけて新聞記事にしてもらったのだけれども、その新聞記事を読んだ NHK のラジオ深夜便のディレクターの方が、ちょうど分館で講演会をやるときに来てくださったのですよ。僕の話の聞き前から、「西村さん、ぜひラジオ深夜便に出てください」ってオファーしてくれたのですよ。そのディレクターもいろんなところにアンテナを張っているわけですよ。ラジオ深夜便の番組の「私のエッセイ」という番組があって、アンテナをいっぱい張って、出ていただける方を探しているわけです。それで、そのアンテナにたまたま僕が引っかかって、僕の講演会に来てくれて、僕が話す前にオファーしてくれたのですよ。僕が1時間くらいお話したら、その人はもう、一生懸命メモを取って、大学ノートにいっぱい書いて、その後、正式ってこともないのだけれども、「是非西村さん、お願いしたい」と言ってくださいました。中西悟堂に興味を持ったこととか、古い地図の話もしましたが、それをまとめていただいて、放送原稿を僕とそのディレクターで作ってね。NHKの放送センターに行って、スタジオの中にその原稿とともに、一人でこもってしゃべるわけですよ。スタジオでマイクを前にしゃべると、いつもの調子が出ない、我ながら。スタジオは借りる時間が決まっていて録音のし直しなんかできないから、生番組と同じで一発勝負です。その原稿を読むのだけど、作文読んでいるようでね。自分でも「緊張」というとおかしいけれども、いつもの調子が出ないのですよ。僕がこういうお話をするときというのは、ほとんど原稿って作りませんから、もう頭にあることをどんどんどん話してい

くわけで、いちいち原稿用紙に書いたのを読まないんだけど、ラジオ深夜便の場合はそうはいかないから、やっぱり原稿を読むわけです。我ながら、「普通の西村さん」じゃない人がしゃべっているのかなあと思うぐらいでした。

ラジオ深夜便は全国放送で、僕の知り合いで熊本にいる人が、たまたまその放送を聞いてくれて、その後、連絡が来てびっくりしちゃいましたね。またもう一つ、次の展開があって、ラジオ深夜便の月刊誌があるのですが、そこに、ラジオ深夜便の話を書いてくださいって言われて、野鳥の父、中西悟堂の原稿と鳥の写真を載せたりしました。とにかく、別に自分からセールスしたわけじゃないのだけれども、いろんなところにアンテナを張っているところに僕の電波が引っかかった、今回も原田さんのアンテナに引っかかったわけですけども、そのように発信していることによって思いがけない展開が来る。持っているのかなあと思いますが、冗談ですけどもね。さっき言った、写真を撮っている時に声をかけてくれたご婦人もそうだし、NHKのディレクターの人もそうだし。

高橋：質問を一つだけ受けたいと思います、どなたか、これは聞いてみたいというのがありますか？

参加者：野鳥を観に散策に行ったりするときに、初心者はカメラが初めてでも大丈夫なのかということです。ただ歩いていてもつまらないので、野鳥を観る、そして写真を撮るっていう目的を見つけて歩くのは楽しいなと思ったんですけど。そういうお仲間はずでに出来ていて、初心者お断りみたいな感じなのですか。

西村：そういうことはありませんが、はなから写真を撮るっていうのは無理ですね、まず、鳥が見つけれないですからね。花だったらそこにあるし、じっとしている、虫だったらもしかしたら捕まえることもできるかもしれないんだけど、鳥って捕まえることもできないし、羽がはえて飛んでいっちゃう。だから最初は、野鳥観察会とか、探鳥会とかそういうところから始められるといいのじゃないかな。僕なんかも何にも知らないで探鳥会に参加したんですよ、今から44年前です。その時、23歳だったんですけども、初めて参加した時に、これは歳をとっても楽しめるなと思った。私も前期高齢者になりましたけれどもね、今も楽しめます。今だったら、いろいろネットでも調べられますし。

参加者：探鳥会に行きたいと思ったんですけど、開催していますか。

西村：今はね、コロナのせいで、僕がやっている善福寺公園の探鳥会も中止しているんですよ。なかなか、多人数で集まるのは難しいんでね。コロナがおさまったら、そういうの、やりたいなと思っています。多いと4、50人集まっちゃうから。

最後に、これまた変わったエピソードです。杉並区は、善福寺川「水鳥の棲む水辺」創出事業っていうのをもう14、5年行っています。その担当の方が、中西悟堂が戦前、淡水魚のトゲウオを善福寺川で初めて見つけたことを知って、まずトゲウオのことを調べて、次に中西悟堂の事を調べたいと思って検索したら、中西悟堂研究会というのにあたった。四国にある中西悟堂研究会代表の中村滝男さんって方に電話して、どなたか中西悟堂に詳しい方いらっしゃいませんかと聞いたら、実は杉並区には西村さんという人がいる、ドンピシャですよと言われて。それで区役所の人から僕のところにかかってきて、善福寺川のシンポジウムで講演するようになったのです。その後、区役所の2階のギャラリーで、中西悟堂と善福寺についての小さい展示会があったのですが、そこに郷土博物館分館の学芸員さんが講演を聴きにきてくれて、そこで分館で企画展が出来るといっているので、先程の「野鳥の父、中西悟堂と善福寺池」という展示が出来たのです。これもね、区役所の人が僕にコンタクトを取らなかったら、そういう話にいかなかったのです。やっぱり、僕は持っているなあと感じました。

高橋：皆さん、もう一度、拍手を。ありがとうございます。

西村：どうも、すいません。ありがとうございます。

高橋：西村さんも、最初は野鳥写真家ってご紹介だったのですが、お話を伺ったら「知りたいことを深め伝えよう」というテーマを持っていらして、原田さんのアンテナに西村さんがかかってくださって、という言い方はおこがましいですけども、私たちの講座もちょっと持っているのかなと、図々しく思ったりしました。